



僕は先輩のペット じゃない！



富樫 かづや

「――桐崎君、あーんして」

「いや、だから恥ずかしいですよ……」

七塚先輩は弁当に入っていた鶏の唐揚げを一つ箸で摘むと、僕に食べさせようと差し向ける。席をくっつけて一緒に弁当を食べている姿は、よそから見ればまるで仲良さあつあつカップルの様に見えるのかもしれない。

「けど、七塚先輩と僕はそんな関係では無い。」

「ほら、早く」

「弁当くらい自分で食べられます」

「ダメ、これは命令よ？」

黒く澄んだ瞳で僕を真っ直ぐと見つめながら七塚先輩は言う

結局、僕は押しに負け渋々と口を開くと七塚先輩は愛おしそうに食べさせてくれる。

そして、口に入れた唐揚げをちゃんと飲み込んだことを確認すると七塚先輩は『よく出来ました♪』と僕の頭を優しく撫でてくれた。

その光景はまるで、ペットを可愛がるかのように――

「よし、良い子だね」

七塚先輩は嬉しそうな笑顔を僕に向け無邪気に言う

どうしてこうなったのだろうか？未だに訳がわからない

ようやく弁当を食べ終えたと思っていると七塚先輩は、お嬢様の様な立ち振る舞いで艶やかな黒の長髪をなびかせながら席を立ち上がると僕の手を取り

「じゃあ、御飯も食べたし行くよ」

「……またですか？」

「食後の散歩は大事なのよ？キチンと運動しないと」

「でも、学校内ですることじゃないですよね？」

「これも命令」

「はあ、どこまで身勝手な人なんだか」

『命令』それは魔法の言葉。

不思議なもので、この台詞を言われると僕は反論する事が出来ない。

何故なのか言うと、七塚先輩は『御主人様』で、僕は『ペット』だからである。

この珍妙な関係が出来上がってしまったのは二週間前、僕が高校に入ったばかりの話で七塚先輩と出会ったのはその頃だ。まあ、昔から僕は冴えなくて取りえも何かある訳でも無い。

小学校も中学校も何故だかいつも席順は教室の一番と後で存在感すらあるのか疑問。

勿論、こんな目立たない僕だから彼女とかだって居る訳もなかったし、友達もそんなに居るわけでもなかった……いつも、輪に入りきれず浮いていたのは確かだ。

「そういや、女子の友達もあんまり居なかったかな？モテないのか？目立ってなかったのか？」

「どちらにしても、良い事なんてあった覚えは無い。」

そんな僕でも高校生になった訳で、この城聖学園に入学したてだった頃は文字通り右も左も分からず

にいた。その時、初めて僕に声をかけて来たのが一つ上の先輩、七塚乃恵美

僕の『御主人様』である。

七塚先輩と出会ったのは校門前、お嬢様の様に可憐な姿に僕は釘付けだった。

俗に言う、一目惚れと言うやつだ。

けれど僕の思い描いていたイメージとは少し、というか大分違っていた様でとても不思議な人。

だって、初対面の僕に開口一番で放った言葉が『ねえ、キミ。私のペットになってよ』
これは冗談ではない、こんな馬鹿げたことを真面目に言っているのだから。無論、そんな馬鹿げた

ことを言われてすぐに首を縦に振るほど僕は狂っていない。

僕のどこに興味を持ったのかなんて知らないし、何をしたいのかもわからない。

けれど、憧れの人に気に入られたのは悪い気がしなかったから、反論も出来ずに今に至る訳である

。（でも、本当はこんな関係を望んでいるわけではないんだ……）

僕は先輩のペットじゃない！

<http://p.booklog.jp/book/59987>

著者：富樫 かづや

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/berumo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/59987>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/59987>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ